

横瀬浦の発掘調査で出土したIX - 1 d 類白磁が示唆する時代背景。

村川逸朗（一般社団法人西海文化財研究所）

堀内和宏（つがる市教育委員会）

1. はじめに



写真1 横瀬浦出土の（IX - 1 d 類）白磁皿

前回の調査（長崎国際大学博物館学芸員課程・一般社団法人西海文化財研究所 2021）で建物跡の柱穴から出土した炭化物を C14 年代測定にかけたところ 1420 年代の修正値が出て、この横瀬浦がポルトガル船の来航により繁栄した 1562 年より古い時代から生活が営まれていたことが分かった。今回の調査では、それより古い E 期（13 世紀中葉～終わり、山本信夫 2000）の中国製貿易陶磁器である白磁皿（太宰府編年：IX - 1 d 類）が出土したことにより、さらに年代的に遡ることになった。この横瀬浦の発掘調査は昨年より始まったが、まだ本格的な解明は緒についたばかりで、もっと古い出土遺物が確認されるかもしれない。

長崎県教育委員会によって調査された新幹線車両基地関係の発掘調査（長崎県教育委員会 2019）によって、カムイヤキと高麗産（朝鮮半島産）無釉陶器が出土したことから、南島社会との南北方向の仲介貿易の新たな様相が考古学的な資料で確認されることとなった。かつては田中健夫氏などの文献の研究者によって示唆されていた、松浦半島の志佐氏などに代表される西北九州の勢力による、高麗・朝鮮王朝と南島社会との間の仲介貿易（竹内理三・瀬野誠一郎・田中健夫 1980）であり、宋・元と中世日本との間で、博多が窓口となる東西の交易ルートと並立する、縦の交易ルートの裏付けでもある。

最近の中世考古学の研究が進むなかで、海流が関係するこのような西北九州の海の交易ルートのことを真剣に考える必要性も生じてきているのではないかと考えるようになった。必ずしも必要十分な資料が揃っているわけではないが、薩摩塔の分布（高津ほか 2010・井形進 2012・田中史生 2022）など、おぼろげな歴史像の輪郭は見えてきており、いくつかの傍証となる出土資料を用いて検証する段階にはいっているのではないかと考える。



IV-927

写真2 竹松遺跡出土朝鮮半島産無釉陶器とカムイヤキ（左下）



IV-902

IV-746

IV-930

写真3 左は竹松遺跡出土高麗産無釉陶器とカムイヤキのそれぞれの口頸部断面を並べたものである。質感・色調とも酷似するが、左のカムイヤキは小粒子が目立ち判別可能（現熊本大学埋蔵文化財センター新里亮人氏ご教示）。（長崎県教育委員会 2019）（番号は『竹松遺跡IV』の挿図番号）

2. 白磁（IX - 1 d 類）が出土する時代背景

先に述べたように、この資料は 13 世紀中葉～末の中国製貿易陶磁器である白磁であり、時代背景としては文永弘安の役とその後の交易をおこなっていた鎌倉時代の激動の時期にあたるのではないかと

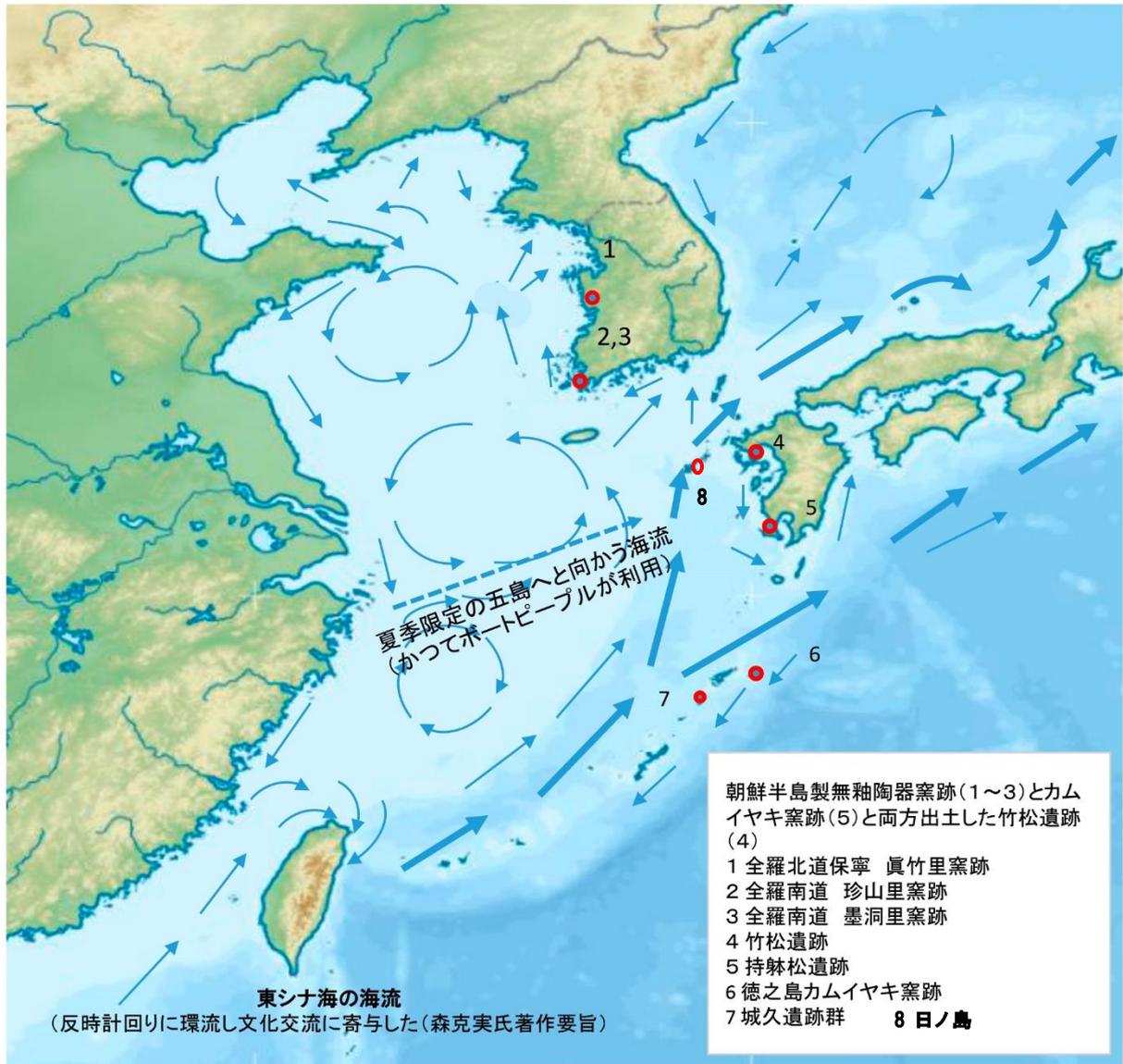


図1 東アジア海域世界

と思われる。この期間内の海難事件としては、『青方文書』に見える志佐氏や、奈留氏が関係した事例で、「関東使者義首座注進状案 唐船破損間事」(永仁6年；1298年渡唐船の遭難事例)がある。『青方文書』は現在では長崎歴史文化博物館に所蔵され、中世における長崎地域の対外交易の様相を伝える貴重な地元所在資料となっている。内容としては、日元貿易関係の唐船が日ノ島の近くで遭難し、志佐氏や奈留氏、近郷、在津の住民達はその積荷を運び取るという略奪事件が起った(海に落ちた積荷は拾得してもいいという社会通念はあったが)。日ノ島は五島列島中部の若松島の属島で、この略奪品の中に北条本家得宗家関係者の積荷があったために大事件となったものである。以下は書き下し文である。

【一、唐船四月廿四日、辰末どき海俣より牧羊。有口(福力)において、巳の初めどきに破損。牧羊して破損まで一里内外か、此所は、即ち樋島(日島)の地域なるをもって、よって樋島の住人百姓等、船七艘をもって御物以下の金帛を運び取る(或いは二度、或いは一度)。海俣において悉く見知し了んぬ。】上記の海難事件は、日本国を揺るがす大事件だった文永弘安の役(1281年)から17年後の事

で、役の 17 年後に中国に向け「御物以下の金帛」等の貿易船を鎌倉幕府が出帆させたことが確認できる。



写真3 永仁五年銘石塔

日ノ島は 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけて、現存数 70 基近くの中央式石塔群が設置されたことで知られる(若松町教育委員会編 1996)。石材には福井県高浜町日引地区で製作されたもので搬入品であった(大石一久 2014 ほか参照)。中央勢力の介入する対外貿易船の経由地として日ノ島など五島列島周辺海域は重要な位置づけを持っていた(註1)。

なお、この海難事件があった 1 年前の永仁 5 年銘の五輪塔が川棚にある(川棚町郷土資料館所蔵)。銘文中に真言密教を表す(大日如来)と念仏(南無阿弥陀仏)が併記されており、「源長盛の後家」が自らの死後の冥福を祈る逆修碑である。長崎県内の逆修碑として最古の事例であり、西彼杵半島産の緑色凝灰岩が石塔の素材として用いられ鎌倉後期から流通していたことを示す確実な事例としても注目される(大石 2014)。西彼杵半島と大村湾内との密接なつながりが石造文化でも示されている。

さて、真言密教と念仏の融合を推し進めたのは根来寺の創建者である覚鑊(かくばん)で、肥前国藤津荘(現佐賀県鹿島市)出身で、嘉保 2 年(1095 年)に伊佐平次兼元の三男として生まれた覚鑊は、真言宗を代表する学僧であり、紀伊の根来寺の開祖でもある。『五輪九字明秘密釈』の撰述により、五輪塔の理論的組織者としても知られる。次節では、伊佐平次兼元の系譜について大宰府との関係もみながら考えてみたい。

3. 肥前と薩摩・南海をつなぐ伊佐平氏

出土遺物の面から朝鮮半島～大村湾沿岸～薩摩西部～奄美諸島～琉球諸島とつながる交易ルートが復元されている(長崎県考古学会 2016)。

古文献の除目史料や「指宿氏略譜」では、11 世紀後半に相当する人物として、九州内の行政監察に当たる官職である太宰権小監の伊佐兼重・兼時親子がいる。その後、12 世紀前期には、同じく伊佐平氏の系譜につながる島津庄開墾者の平季基と薩摩国郡司良道の兄弟が現れる。良道の娘(三女)の婿として彼杵久純の名も確認できる。

良道の子の阿多忠景は薩摩一国と周辺を支配するも、勅勘を受けて喜界島に逃れ(『吾妻鏡』)、久純の子で忠景の娘婿の宣澄(=重澄)が支配

権を継承する。これらの考古学的事象・文献史料から、朝鮮半島～大村湾沿岸～薩摩西部～奄美諸島～琉球諸島とつながる交易ルートが、大宰府を掌握して日宋貿易を振興した平氏政権の対外交易の基盤となったことが分かる(野口実 1994・堀内 2016)。近年では中国浙江省寧波産の梅園石を用いた薩摩塔の分布から、南島から薩摩、西北九州の海域世界のつながりについては、南西諸島つたいのルートからの復元も進んでいる(高津ほか 2010・井形 2012・田中史生 2012)。その分布は薩摩から肥前(佐賀・長崎県内)・筑前など偏在性が見られ、平戸島での中心的な分布の他、大村市立福寺町の龍福寺の境内にも一部材の柱状石が残存している。分布の背後に東シナ海を意識した物流が伺われ、造立の背

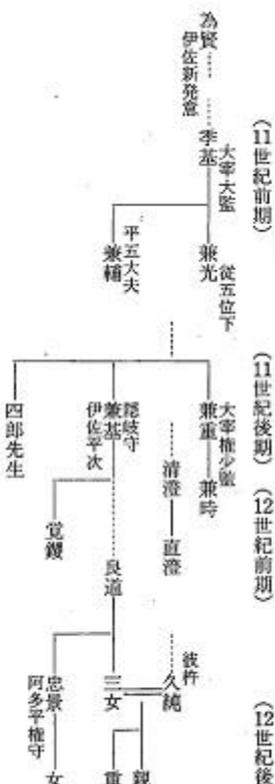


図2 肥前平氏系譜
(野口 1994)



図3 竹松遺跡と『木都』記銘紡錘車に関する周辺の遺跡

後には環東シナ海で国家に依存しないマージナルな性格を有する中国海商の仏教信仰の存在が指摘されている（久山町教育委員会編 2010・大石 2014）。また、白磁皿IX類の伝播ルートについても、寧波・杭州～博多の東西ルートによらない南西諸島のルートの可能性が指摘されている（註2）。

4. おわりにかえて

長崎県の地形は特異な特徴をもっていて、半島や離島が多いばかりではなくて、大村湾の存在が重要なポイントになっている。大村湾と有明海は諫早地峡によって隔てられているが、「船越」という地名が残っているように、この地峡を超えて少なくとも古墳時代よりも古く大型甕棺が出土した『富の原遺跡』の弥生時代まで遡って海運が繋がっていたとも考えられる。この海運のこともだが、これまで長崎県の古代のことは、よくわからないことが多く他県の比しても遅れをとってきたことは否めない。その大村湾内において、平成 23 年から、令和元年の 8 年間で大村湾東岸に位置する竹松遺跡の調査及び報告書の発刊まで行い、特にこれまで空白だった古代から中世（14 世紀前半）までのことが明らかにできたことは大きい。西彼杵半島の西岸地域の歴史的様相については、発掘調査成果は断片的であり、未だ不明の点が多いが、今回の発掘調査成果は空白のパズルを埋める 1 片として、また、この領域は古代の“周賀の郷”と想定されてもいることから、大きな意義を持つと考えている。

ここで呈示したいのは、平成 24 年度の発掘調査（TAK201202）で出土した刻書紡錘車である。



写真4 『木都』紡錘車

『木都』紡錘車の意義について高島英之氏は、「坂東在住（上野国南西部から武蔵国北西中部）の鎮兵や防人と関係するものとの論究があるもの（高島 2019）、竹松遺跡出土の『木都』記名紡錘車が遺構に伴っていないため、鎮兵や防人の故地である「坂東」の出土例を参考にするか、『木都』と刻まれた文字を判読するしかないということになる。平成 24 年にこの資料を国立歴史民俗博物館の平川南館長〔当時〕や武井紀子氏らに見ていただいた時に、「木」は「き」と発音し「城」の文字をあてることもあるし、「都」は「つ」と発音し、おそらく「津」の文字を充てて、「そのきのつ」、すなわち彼杵郡の郡津と

いう意味だろうとのことであった。正式報告（長崎県教育委員会 2018a）において、堀内は以下の見解を付加した。国語学で言う上代特殊仮名遣いにおいて「木」は中舌母音のイ段乙類であるのに対し、「杵」はイ段甲類である。甲類乙類の文字表記の通用は畿内の標準語では平安時代以降に一般化するが、『万葉集』の東歌・防人歌に見えるように 8 世紀初頭の段階で東国では二つは混用されていた。『木都』紡錘車における文字表記の混用自体、東国からの防人派遣によるものであった可能性がある。また、九州内における刻書紡錘車の出土は、他に佐賀県小城市の丁永遺跡例があるだけである。いずれも西海道肥前路という古代官道沿いの遺跡からの出土であり 663 年の唐新羅連合軍との白村江の敗戦後の天武持統期の西北九州の防衛体制、防人派遣との関係が推測される。『地名伝承学』でいえば、時代の変化とともに社会が大きく変化し、その音はそのままに当てられる漢字の変化を考えれば、「城」（き）が「木」に、「津」（つ）が「都」に変化したことは考えられる。

いずれにせよ律令祭祀に関わる呪術性をもった刻書紡錘車の歴史的意義は多義的であり、竹松遺跡の持つ多義性と対応する。白村江の敗戦以降の西北九州の防衛拠点の「城」としての性格、彼杵郡家の施設の一部を占める郡津、11 世紀後半以降（玉縁の白磁坏Ⅳ類に象徴される太宰府 C 期）の交易拠点としての性格に郡津はつながり、「木」は「水」とも読める字形を持っており、竹松遺跡は「水津」でもあった。

また、『木都』の文字は高島氏によれば、「木」を「都」（つむぐ）と解されており（高島 2019）、そのことは坂東在住の人が鎮兵や防人として「彼杵国」に着任し、故郷の産業である「養蚕」になぞら

えて、蚕の「まゆ」を解きほぐして生糸を作り、その生糸で作った着物で暖をとったように、現地の山から木を伐採し、それを製材して建物をつくったとの暗示とは考えられないだろうか。9世紀頃の中国では寺院建設があり「木」の交易も推定されるところでもある（註3）。

白村江から数百年の年月をかけ、竹松遺跡が対外交易拠点となった可能性があり、先述のように、横瀬浦を含む西彼杵半島北部から五島列島を含む海域も、中央勢力による対外交易に五島列島の勢力が大きく介入する抗争の舞台となっていた。元寇から十数年足らずの経過で、横瀬浦もまた、東シナ海での交易の一翼を担う地となったことを、今回の発掘調査での白磁皿Ⅸ類の出土から考察してみた。

最後に、大村湾域の竹松遺跡での成果に続く、西彼杵半島西海岸での中世考古の資料の増加にも期待するとともに、この西彼杵半島が石鍋の生産地でもあることから、これらも含めた説明が待たれる。

本稿を草するのに際し、川畑敏則、土井和幸両氏の助力を得た。記して感謝致します。

【注記】

註1：故正林護氏（先々代長崎県考古学会々長）は、1980年代のポートピープルが7,8月の夏季に集中するのを気づいた。図1の東シナ海の海流を確認すると、夏季のみの海流がありこの時期にはそのほとんどが二昼夜で五島に漂着する。

註2：森達也・四日市康博両氏のご教示による。

註3：（長崎県教育委員会2018b）で、中国との木材（榎；まきのき）の交易の可能性を考察してみたが、平戸島の東海岸の中央部、川内港の南に所在する「木ヶ津」も後背地に山地が控え木材積出港の可能性があると考えている。

【引用・参考文献】

井形進 2012『薩摩塔の時空～異形の石塔を探る～』花乱社

大石一久 2014「第6章 石造物からみた中世・大村の様相と仏教文化」

（大村市史編さん委員会編 2014『新編大村市史』第2巻「中世編」）

高島英之 2019「東北及び九州出土古代国書紡輪の歴史的意義について」（『研究紀要』37・群馬県埋蔵文化財調査事業団）

高津孝・橋口亘・大木公彦 2010「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」『鹿大史学』第57号・鹿大史学会

竹内理三・瀬野瀬一郎・田中健夫 1980『長崎県史』古代・中世編

田中史生 2022「『平家物語』と薩摩塔—海商船と南九州—」『国立歴史民俗博物館研究報告』232

長崎県教育委員会 2018a『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書5

長崎県教育委員会 2018b『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

長崎県教育委員会 2019『竹松遺跡Ⅳ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第11集 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

長崎県考古学会編 2016『9～11世紀における大村湾海域の展開～東アジア世界の中の竹松遺跡～』（平成28年度長崎県考古学会大会（大村大会）発表資料集）

野口実 1994「鎮西における平氏系武士団の系譜的考察」『中世東国武士団の研究』高科書店

久山町教育委員会編 2010『首羅山遺跡発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集

堀内和宏 2016「肥前平氏と薩摩・南方との交流について」（長崎県考古学会編 2016所収）

村川逸朗 2015「長崎県域等に於ける古代の烽ネットワーク復元に向けてのアプローチ」（『高野晋司氏追悼論文集』所収）

山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV』大宰府市の文化財49・大宰府市教育委員会

若松町教育委員会編 1996『曲古墓群—五島列島若松町日島所在の中世墓群—』若松町文化財調査報告書第1集

長崎国際大学博物館学芸員課程・一般社団法人文化財研究所 2021『長崎県西海市西海町横瀬郷試掘調査報告書』長崎国際大学博物館学芸員課程発掘調査報告第1集